

閑山

坂口安吾

青空文庫

昔、越後之国魚沼の僻地へきちに、閑山寺の六袋和尚といつて近隣に徳望高い老僧があつた。

初冬の深更しんこうのこと、雪明りを愛するまま写経しやくきょうに時を忘れていと、窓外から毛の生えた手を差しのべて顔をなでるものがあつた。和尚おしょうは朱筆に持ちかえて、その掌に花の字を書きつけ、あとは余念よねんもなく再び写経に没頭ぼつとうした。

明方ちかく、窓外から、頻しきりに泣き叫ぶ声起つた。やがて先ほどの手を再び差しのべる者があり、声が言うには「和尚さま。誤つて有徳の沙門しゃもんを髻なまぶり、お書きなさいました文字の重さに、帰る道が歩けませぬ。不愍ふびんと思ひ、文字を落して下さりませ」見れば一匹の狸であつた。硯すずりの水を筆にしめして、掌の文字を洗つてやると、雪上の蔭間かげまを縫ぬい、闇の奥へ消え去つた。

翌晩、坊舎の窓を叩き、訪おとう声ながした。雨戸を開けると、昨夜の狸が手に梅つがの小枝をたずさえ、それを室内へ投げ入れて、逃げ去つた。

その後、夜毎に、季節の本草をたずさえて、窓を訪れる習いとなつた。追々昵懇じつこんを重ねて心置きなく物を言う間柄となるうちに、独居の和尚の不便を案じて、なにくれと小用に立働くようになり、いつとなくその高風に感じ入つて自ら小坊主に姿を変え、側近に仕

えることとなつた。

この狸は通称を団九郎と言ひ、眷属では名の知れた一匹であつたそう。ほどなく経文を暗んじて、諷経に唱和し、また作法を覚えて朝夜の坐禅に加わり、敢て三十棒を怖れなかつた。

六袋和尚は和歌俳諧をよくし、又、折にふれて仏像、菩薩像、羅漢像等を刻んだ。その羅漢像、居士像等には狗狸に類似の面相もあつたというが、恐らく偶然の所産であつて、団九郎に關係はなかつたのだろう。

いつとなく、団九郎も彫像の三昧を知つた。木材をさがしもとめ、和尚の熟睡をまつて庫裏の一隅に胡座し、鑿を揮ひはじめてのちには、雑念を離れ、屢《しばしば》夜の白むのも忘れていたということである。

六袋和尚は六日先んじて己れの死期を予知した。諸般のことを調べ、辞世の句もなく、特別の言葉もなく、恰も前栽へ逍遙に立つ人のように入寂した。

参禅の三摩地を味ひ、諷経念誦の法悦を知つていたので、和尚の遷化して後も、団九郎は閑山寺を去らなかつた。五蘊の羈絆を厭悪し、すでに一念解脱を発心していたの

である。

新らたな住持は弁兆と言つた。彼は單純な酒徒であつた。先住の高風に比べれば百難あつたが、彼も亦一生不犯の戒律を守り、専ら一醉また一睡に一日の悦びを托していた無難な坊主のひとりであつた。

弁兆は食膳の吟味に心をくぼり、一汁の風味にもあれこれと工夫を命じた。団九郎の坐禪諷經を封じて、山陰へ木の芽をとらせに走らせ、又、屢《しばしば》蕎麥を打たせた。一醉をもとめてのちは、肩をもませて、やがて大蘿蔔頭（だいこん）の煮ゆるが如く眠りに落ちた。ことごとく、団九郎の意外であつた。一言一動俗臭芬々として、甚だ正視に堪えなかつた。

一夕、雲水の僧に變じて、団九郎は山門をくぐつた。折から弁兆は小坊主の無斷不在をかこちながら、酒食の支度に余念もなかつた。

雲水の僧は身の丈六尺有余、筋骨隆々として、手足は古木のもようであつた。両眼は炬火の如くに燃え、両頬は岩塊の如く、鼻孔は風を吹き、口は荒繩を縫り合せたようであつた。

雲水の僧は庫裏へ現れ、弁兆の眼前を立ちふさいだ。それから、破れ鐘のような大音

声しやうでこう問うた。

「酒糟の漢（のんだくれめ）仏法を喰うや如何に」

弁兆は徳利を落し、さて、臍せいかたんでん下丹田に力を籠めて、まず大喝だいかつ一番これに応じた。

と、雲水の僧は、やおらかたえの囲炉裏いろりの上へ半身をかがめた。左手に右の衣袖を収めて、紅蓮ぐれんをふく火中深くその逞しい片腕を差し入れた。そうして、大いなる燠おきのひとつを驚わしづか掴みにして、再び弁兆の眼前を立ちふさいだ。

「酒糟の漢よく仏法を喰うや如何に」

雲水の僧はにじり寄つて、真赤な燠を弁兆の鼻先へ突きつけた。弁兆に二喝を発する勇氣がなかった。思わず色を失つて、飛び退いていた。

「這の掠虚頭の漢（いんちきやろうめ）！」

雲水の僧は矢庭やにわに躍りかかつて、弁兆の口中へ燠を振ねじ込むところであった。弁兆は飛鳥の如くに身をひるがえして逃げていた。そのまま逐ちくでん電して、再び行方ゆくえは知れなかった。

雲水の僧は住持となつた。人称よんで吞火和尚と言つた。即ち団九郎狸であつた。懈怠けたいを憎み、ひたすら見性成仏を念じて坐禅三昧に浸り、時に夜もすがら仏像を刻んで静寂な孤

独を満喫した。

村に久次というしれものがあつた。大青道心の坐禅三昧を可笑しがり、法話の集いのある夕辺、庫裏へ忍び、和尚の食餌へやたらと砥粉をふりまいておいた。砥粉をくらえば止めようと欲してもおのずと放屁ほうひして止める術がないという俗説があるのだそう。

果して和尚は、開口一番、放屁の誘惑に狼狽した。臍下丹田に力を籠めれば、放屁の音量を大にするばかりであり、丹田の力をぬけば、心気顛てんとう倒して為すところを失うばかりであつた。

「しばらく誦経致そう」

和尚は腹痛を押えてやおら立上り、木魚の前に端坐した。優婆塞優婆夷の合唱にかくれて、ひそかに始末する魂胆こんたんであつた。そこで先ず試みに一微風を漏脱ろうだつしたところ、ことごとく思量に反して、あとはもはや大流風の思うがままの奔出ほんしゅつを防ぎかける手段てだてもなかつた。大風笛は高天井に木魂して、人々がこれを怪しみ誦経の声を呑んだ時には、転出する凸凹様々な風声のみが大小高低の妙を描きだすばかりであつた。臭気堂に満ちて、人々は思わず鼻孔びこうに袖を当て、ひとりの立上る気配を知ると、我先きに堂を逃れた。

釈迦牟尼成道の時にも降魔こうまのことがあつた。正法には必ず障礙しょうがいのあるもの、放屁を抑

えようとして四苦八苦するのも未だ法を会得えとくすること遠きがゆえであり、放屁の漏出に狼狽して為すところを忘れるのも未だ全機透とうたつ脱して大自在を得る底の妙みょう覺かくに到らざるがゆえである。即ち透脱して大自在を得たならば、拈花ねんげも放屁も同一のものであるに相違ない。静夜端坐して、団九郎はかく観じた。

それにつけても、俗人の濟度さいどしがたいことを嘆いて、人里から一里ばかり山奥に庵を結び、遁世して禅定三昧に没入した。

冬がきて、田舎役者の一行がこの草庵そうあんを通りかかった。

雪国の農夫達は冬毎にその故里の生業せいぎょうを失い、雪解けの頃まで他郷へ稼ぎにでかけるのが昔からの習いであった。部落によつて、あるいは灘伊丹の酒男、あるいは江戸の奉公と様々であるが、所によつては、越後獅子の部落もあり、村廻りの神楽狂言芝居等を伝承するところもあつた。もとより正業は農であるが、副業も亦概ね世襲おおもむで、現今も尚このあたりには冬毎に芝居を巡業する部落がある。丈余の雪上に舞台を設え、観客も亦雪原むしろに筵むしろをしき、持参の重箱をひらいて酒のみながら見物する。木戸として特に規定の金額がないから、金銭を支払う者は甚だ稀で、通例米味噌野菜酒等を木戸銭に代え、一族ひき

つれて観覧にあつまる。演者はただひたすらに芝居を楽しむという風で、寒気厳烈の雪原とはいえさながらに春風駘蕩、「三年さきに勘平の男前の若い衆はどうなすったね。女の子が夢中になつたものだったが、達者かね」「あの野郎は嬬をもらつて、今年は休ましてもらいますだとの」などという会話が幕の間に舞台の上下で交わされる。座長と見える老爺など終生水呑百姓の見るからに武骨そのものの骨柄であるが、巧みに女形をしこなして優美哀切を極め、涙の袖をしぼらせること、いつの年も変りがないということである。

折から一行のひとりに病人ができた。通りかかった草庵をこれ幸いに無心して病人を担ぎ入れたが、翌日も、また翌日も、はかばかしくいかない。先を急ぐ旅のこととて、ひとりの附添いを置き残して一座の者は立去つた。

病人は暮方から熱が高まり、夜は悪夢にうなされて譫言を言い、屢々《しばしば》水をもとめた。明方に漸く寝しずまるのが例であつた。附添の男は和尚に祈禱を受け、願した。同村の某が同じような高熱に悩んだとき、真言の僧に祈禱を受け、庵摩耶底連の札を水にうつしていただいたところ、翌日は熱も落ちて本復したことを思いだしたのであつた。「拙僧は左様な法力を会得した生きぼとけでは、和尙は答えた。「見られる通り

俗世間を遁れ、一念解脱を發起した鈍根の青道心でゐる。死生を大悟し、即心即仏非心非仏に到らんことを欲しながら、妄想尽きず、見透するところ甚だ浅薄な、一尿管床の鬼子（寝小便たれ小僧）とは即ちこの坊主がこと。加持祈祷は思いもより申さぬ」と受けつける気配もなかった。

病人は日毎に衰え、すでに起居も不自由であった。頻りに故里の土を恋しがり、また人々をなつかしんだ。その音声も日を経るごとに力なく、附添いの友の嘆きを深くさせるのみだった。彼は執拗に和尚の祈祷を懇願した。

「定命はこれ定命でゐる。一切空と観じ、雑念あつては、成仏なり申さぬぞ」

和尚の答えは、いつもながら、それだけだった。傍に瀕死の病人もなきが如く、ひねもす禪定三昧であった。その大いなる跏趺坐僧の姿は、山寨を構えて妖術を使う蝦蟇のように物々しく取澄して、とりつく島もない思いをさせた。

さりとて病状は一途に悪化を辿るばかりで、人力の施す術も見えないので、附添いの男は、暇あるたびに、坐禅三昧の和尚の膝をゆさぶって、法力の試みを懇請するほかに智慧の浮かぶゆとりはなかった。ゆさぶる膝の手応えは太根を張った大松の木の瘤かと思われるばかり、なかなか微動を揺りだすことも絶望に見える有様であった。

「生者は必滅のならない。執着して、徒らに往生の素懐を乱さるるな」

和尚は俗人の執念を厭悪するものの如く、ときに不興をあらわして、言った。そうして、膝をゆさぶられても、半眼をひらこうとすらしなかつた。

然し、和尚の顔色も、病者の悪化に競い立って、日に日に光沢を失い、その逞しげな全身に、なんとなく衰えの気が漂つた。

春がきて、巡業の一行が再び草庵へ戻つたとき、すでに病人は臨終を待つばかりであつた。人々は不幸な友の枕頭に凝坐して、悲嘆にくれたが、もとより人の思いによつて消える命が取戻せようものではなかつた。

草庵の裏山に眺望ひらけた中腹の平地を探しもとめて、涙ながらに友のなきがらを葬つた。回向、引導も型の如くに執り行つたが、和尚の顔色は益々《ますます》勝れず、土気色のむくみを表わし、眉間の憂悶は隠しもあえず、全身衰微の色深く、歩く足にも力失せがちな有様がただならなかつた。

一座の長が進みでて、一様ならぬ長逗留の不始末を詫び、回向の労を深謝したとき、和尚が言つた。

「されば、善根、回向は比丘のつとめ。ましてこの身は見られる如く世を捨てた沙門、お

礼のことはひらに要り申さぬ。ただ、お言葉ゆえ、所望しよせういたしてよろしいものなら、なにとぞ、一念発起の心根をあわれみ、塵じんろう勞断ちがたい鈍根の青道心に劬いたわりを寄せ給いて、浮世の風が解脱の障礙とならぬよう、なるべく早う拙僧ひとりにさせて下されたい」語る言葉にも力なく息苦しげであった。

人々は俄にわかに興きざめ、遺品などとりまとめるにも心せかせて、いとまを告げたが、それを待つ間ももどかしげな和尚の様子に、ほとほと厭いと気さすばかりであった。

人々がものの三四十間も歩いたころ、うしろに奇異な大音響が湧き起った。低く全山の地肌を這いわたる幅のひろいその音響を耳にしたとき、すでに人々の踏む足は自ら七八寸あまり宙に浮き、丹田に力の限り籠めてみても、音の自然に消え絶えるまで、再び土を踏むことができなかつた。

驚いて、草庵の方を振り返ると、和尚は柱に縋すがりつき、呼吸は荒々しくその肩をふるわせていた。

再び大音響を耳にしたとき、和尚の法衣は天に向って駈け去るが如く、裾は高々と空間に張りひろがり、人々の足は自然に踏む土を失って、再び宙に浮いていた。

庵寺あんでらの屁へつき坊主ぼくしゅはの

山の粉雪も黄色にそめ

春のさかりに紅葉もさかせ

おないぶつけつに尻しつ向けて罰ばち当りとは面妖めんあやな

仏様も金かねびかりなら

目出度い 目出度い

あるとき、和尚に依頼の筋があつて、草庵を訪ねた村人があつた。

訪うまでもなく、坐禅三昧の和尚の姿が、まる見えであつた。

「お頼み申します」

と、訪客は和尚の後姿に向つて、慎しみ深く訪いを通じた。跌坐ふざの和尚に微動もなく、返事もなかつた。四たび、五たび、訪客は次第に声を高らかにして、同じ訪いを繰返したが、さながら木像に物言う如く、さらに手て応こたえの気配けいがなかつた。

さて、所在もなさに見廻せば、すでに屋根は傾いて、所々に隙間をつくり、また大空のぞけて見える孔あなもあつた。雨の降る日は傘かささしても間に合うまいと思いやられるのもこ

とわり、豊はすでに苔むすばかりの有様であつた。長虫は処を得て這いまわり、また翹虫は澱みを幸い湧きむらがつて、人の棲家すみかとも思えなかつた。さては和尚も苔むしたかと思われるほど、その逞しく巨大な姿は谷底に崛起する岩石めき、まるまると盛りあがる額も、垢にすすけて、黒々と岩肌の光沢こうたくを放つばかりであつた。

訪客は縁先ににじり寄つた。

「もし、和尚さま」

首を突き入れて、三たび、四たび繰返したが、声の通じた様子もなかつた。

たまりかねて、濡縁ぬれえんへ片膝をつき、這いこむばかりの姿勢となつて、片腕を延して和尚の背中を揺ろうとした。

「もし、和尚さま」

矢庭に彼はもんどり打つて、土の上のところがつていた。彼はそのとき、今のさつき目に見たことが、如何様に工夫しても、呑みこみかねる有様であつた。

後向きの姿ではあるが、不興げな翳かげが顔を掠かすめて走つたかと想像された一瞬間、たしかに和尚の姿がむくむくとふくれて、部屋いっぱいにひろがったのを認めた筈であつたのである。

腰骨の痛みも打忘れて、訪客は麓をさして逃げ帰った。

ある年、行暮れた旅人が、破れほうけた草庵を認めて立入り、旅寝の夢をむすんだ。すでに棲む人の姿はなく、壁は落ち、羽目板はめいたは外れて、夜風は身に沁みて吹き渡り、床の隙間に雑草がのびて、風吹くたびにその首をふった。

深更しんこう、旅人はふとわが耳を疑りながら、目を覚めた。その居る場所にすぐ近く、人々のざわめきの声があるのであった。それは遠くひろびろと笑いどよめく音にもきこえ、またすぐ近くあまたの人が声を殺して笑いさざめく音にもきこえた。

旅人は音する方へにじり寄った。壁の孔を手探りにして、ひそかに覗いた。そうして、そこに、わが眼を疑る光景を見た。

そこは広大な伽藍がらんであった。どのあたりから射してくる光とも分らないが、幽かに漂ただよう明るさによつては、奥の深さ、天井の高さが、どの程度とも知りようがない。さて、広大な伽藍いっばい、無数の小坊主が膝つき交えて蠢うごめいていた。ひとり人は人の袖をひき、ひとりわが口を両手に抑え、ひとりは己れの頭をたたき、またひとりは脾腹ひばらを抑え、百態の限りをつくして、ののしり、笑いさざめいていた。

やがて最も奥手の方に、ひとりの小坊主が立ち上った。左右の手に各小枝を握り、その両肩へ小枝を担う姿勢をとって、両肘を張り、一声高くこう歌った。

「花もなくて」

歌いながら、へっぴり腰も面白く、飛立つように身も軽く一舞いした。

「あら羞しや。羞しや」

小坊主は節面白く歌いたてて、両手の小枝を高々と頭上に捧げ、きりきりと舞った。と、舞い終り、ひよいと尻を持上げて、一足ぼんと蹴りながら、放屁をもらした。

花もなくて。

あら羞しや。羞しや。

小坊主は、舞い、歌い、放屁をたれ、こよなく悦に入ると見えた。同じ歌も、同じ舞いも、繰返すたびに調子づき、また屁の音も活気を帯びて、賑やかに速度をはやめた。

放屁のたびに、満座まんざの小坊主はどツとばかりにどよめいた。手をうつ者もあり、鼻をつまむ者もあり、耳に蓋ふたする者もあれば、さては矢庭にかたえの人の鼻をつまんで振ねじあげる者もあった。ののしり、わめき、さて、ある者は逆立ちし、またある者は矢庭に人の股倉をくぐりぬければ、またある者はあおむけにでんぐり返って、両足をばたばた振った。

異様なこととは言いながら、その可笑しさに堪えがたく、旅人は透見の身分も打忘れて、思わず笑声をもらした。

どよめきは光と共に掻消え、あとは真の闇ばかり。ただ自らの笑声のみ妖しく耳にたつことを知ったとき、むんずと組みついた者のために、旅人はすんでに振じ伏せられるところであった。必死の力でふりほどき、逃れようと焦^{あせ}つてみたが、絡^{から}みつくる者は更に倍する怪力であった。精根つきはてて抵抗の氣力を失ったとき、組みしかれた旅人は、毛だらけの脚が肩にまたがり、その両股に力をこめて、首をしめつけてくることを知った。

ふと気がつけば、草庵の外に横たわり、露を受け、早朝の天日に暴^{さら}されている自分の姿を見出した。

村人が寄り集い、草庵を取^{とりこわ}毀したところ、仏壇の下に当った縁下に、大きな獣骨を発見した。片てのひらの白骨に朱の花の字がしみついていた。

村人は憐^{あわれ}んで塚を立て、周囲に数多の桜樹を植えた。これを花塚と称んだそうだが、春めぐり桜に花の開く毎に、塚のまわりの山々のみは嵐をよび、終夜悲しげに風声が叫びかわして、一夜に花を散らしたということである。この花塚がどのあたりやら、今は古老も

知らないそうな。

(昭和13年『文体』2号)

青空文庫情報

底本：「桜の森の満開の下」講談社文芸文庫、講談社

1989（平成元）年4月10日第1刷発行

2015（平成27）年4月15日第47刷発行

底本の親本：「坂口安吾選集第六卷」講談社

1982（昭和57）年5月刊

初出：「文体 第一巻第二号」

1938（昭和13）年12月11日

入力：日根敏晶

校正：noriko saito

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

閑山

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>